

# ガイドライン配布が対策に弾み 風通しよい職場で互いに守り合う

猛暑の到来が年々早まっている。令和7年4月、神戸市は「神戸市職員熱中症対策ガイドライン」を全市に配布し、この年の熱中症対策をいち早く開始した。ガイドラインの内容周知を軸に、産業医による講話や職場巡視、各職場の自主的な活動等を組み合わせた。同市の対策は、着実に成果をあげている。

## 盛夏を待たずに対応開始 熱中症対策に多年の実績

「夏がどんどん暑くなり、熱中症の発症時期も早まっている。最近は、5月ごろから救急搬送されるケースもある」。神戸市行財政局厚生課長で産業医の竹中春香さんは、市内の状況をこう説明する。

厚生課によると、市職員の救急搬送件数は把握していないものの、暑くなってくると、体調不良を訴える職員に関する相談が寄せられるという。毎年のように職員が熱中症で公務災害認定されているという実情もあり、職員の熱中症対策も、盛夏を待つてからでは遅いということだ。

同市の取り組みは令和7年に始まったものではない。行財政局局長で産業医の樋口純子さんが「熱中症

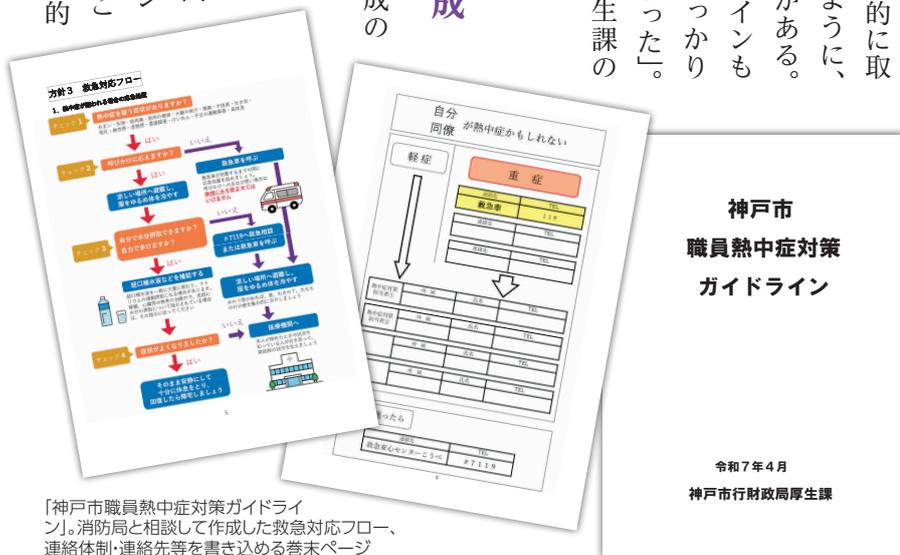
を夏場の現場における最重要課題に位置付け、これまでも継続的に取り組んできた」と強調するように、熱中症対策には多年の実績がある。「今回（令和7年）はガイドラインもでき、組織をあげて、よりしっかりと取り組もうという機運が高まった」。樋口さんは令和7年度の厚生課の意気込みを代弁した。

## ガイドラインは わかりやすさ重視で作成

厚生課がガイドライン作成の検討を始めたのは令和6年の秋。環境局や建設局などの現業職場が熱中症対策に熱心な一方で、事務職場の関心は高くない。ガイドライン策定の狙いは、こうした部署ごとの「温度差」を解消し、全庁的

な対策レベルの底上げを図ることにあった。熱中症対策を始める翌春の配布をめざし、作業を急いだ。厚生課が作成した「たたき台」を産業医が確認し、関係部局との事前調整を経て取りまとめた。

厚生課係長で事務職の今井翔太さんによると、作成にあたって意識し



「神戸市職員熱中症対策ガイドライン」。消防局と相談して作成した救急対応フロー、連絡体制・連絡先等を書き込める巻末ページ



左から行財政局厚生課係長・石丸聖子さん、同課係長・今井翔太さん、行財政局局長・樋口純子さん、厚生課課長・竹中春香さん

たのは「わかりやすさ」。

分量は、表紙、目次込みでA4サイズ10ページ。作業の合間にさっと参照できる。内容も、国の資料（厚生労働省「働く人の今すぐ使える熱中症ガイド」や環境省サイト等）に沿って図表なども引用しつつ、「熱中症を知る」「熱中症の予防」「救急対応フロー」の3項目に凝縮した。令和7年6月スタートの対策義務化についても紹介し、巻末は職場ごとに連絡体制や連絡先を書き込めるページにした。この救急対応フローは独自に工夫した「神戸市版」だ。消防

局と相談し、救急要請の考え方や7119の活用法など、市民向けの救急運用とも整合性のあるものとなっている。

現場での扱いやすさにも配慮した。対応フローや連絡体制は、事業所入口に掲示したり、ゴミ収集車などの車内に貼付したりできる。職場ごとに書き込んでオリジナル版が作れるように、冊子で渡すだけでなく、店内イントラネットにも掲載し、データをダウンロードできるようにした。

ガイドラインを初配布したひと夏の対策を終え、厚生課係長で保健師の石丸聖子さんは確かな手応えを感じたという。「ガイドラインがあった（助かるという声をよく聞いた。発症時の対応が明確に示されたことで、職員は具体的な行動をイメージしやすくなったようです」。ガイドラインは文字通り、職員の「行動指針」として活用された。

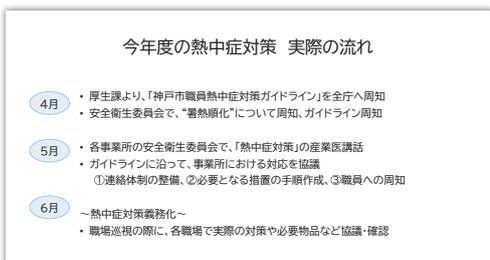
## 産業医4人で全庁を分担 講話は双方向で実践的

職場への周知の主役は4人の産業医だ。環境局の事業所やクリーンセンター、建設局の水環境センターや建設事務所、区役所や本庁も含めた全市長部局と消防局を、主に4人で

分担。講話の実施や安全衛生委員会への参加、職場巡視などを通して各職場の取り組みを支援した。

前述のとおり、令和7年度の熱中症対策が始まったのは、年度明けの4月。ガイドラインが全庁に行き渡ったところで、産業医らが安全衛生委員会に参加、ガイドラインを周知するとともに、暑さに慣れるための「暑熱順化トレーニング」についても早めの取り組みを促した。5月からは各職場での講話も本格化した。

職員を一堂に集められる職場だけではないから、講話の形も様ではない。パワーポイントを使って全職員に直接説明できた部署もあれば、安全衛生委員会での「一口講話」としてメッセージを発し、末端スタッフへの伝達を依頼した部署もある。ディスプレイを設置できない職場では紙資料を配って話をするなど、伝え方も現場に合わせた。講話の中身も同様だ。熱中症の概要といった基



令和7年度の神戸市の熱中症対策の流れ



樋口さんと竹中さんが、講話で用いたパワーポイント資料

本項目は押さえつつ、職員との対話を通して、現場実態に応じた内容を調整している。建設事務所では、「さまざまな現場で、休憩所の場所をどう確保しているか」と問いかけて、その後の職員とのやりとりで講話を構成した。高温多湿で休憩が取りにくい廃棄物焼却施設では、「30分に1回タイマーを鳴らし、それを合図に皆で水を飲む」といったアイデアを、講話の中でみんなで話し合った

## 各職場でユニークな対策

「具体的な工夫やアイデアを、それぞれの現場に合わせて引き出せるような話を心掛けています」と樋口さん。産業医からの一方通行ではない、職員との双方向のやりとりは、市の熱中症対策を現場に即した、より具体的なものにした。

実際、熱中症対策に熱心な職場では、数多くのユニークな対策が生まれた。環境局では、事業所に冷凍庫や冷蔵庫を置き、ゴミ収集車にもクーラーボックスを載せてスポーツドリンクなどを携行した。多くの職場でも、市販の経口補水液や冷却グッズ、塩飴などを常備した。

装備面も充実した。市は令和7年度、ベスト型のファン付き作業服2000着を新たに調達した。すでに導入していた長袖タイプよりも通気性がよく、扱いやすいものを選びたいという職員からの要望に応えた。ガイドラインの検討と並行して準備を進め、令和6年度末までに納品を済ませて新年度に間に合わせた。

港湾局では、脈拍が上昇するとアラームが鳴る時計型のウェアラブルデバイスを現場に出る職員に持たせ



職場巡視でゴミ収集作業を見守る産業医の樋口さん（中央）

た。全身を防護服で覆う草刈り作業時などは、お互いの顔色も把握しづらい。こうした補助ツールは、熱中症の予防に役立った。

## 巡視で積極的に声かけ導入増えたWBG T測定器

産業医は、現場の対策状況を職場巡視で点検する。樋口さんは朝8時、ゴミ収集車で出発する職員に、「水持った？」「塩飴持った？」と声をかけた。建設局の作業現場では休憩場所や飲料水の設置状況を確認し、作業空間が高温になるクリーンセンターでは防護服（タイベック）を着込んだ職員の負荷を想定して観察した。

巡視には衛生管理者や安全管理者、管理職が同席するのが基本だが、人数が割けない職場では最少人数で回ることもある。もっとも、多くの現場では対策はすでに実施済み。樋口さんは「問題点を見つけるといふよりは、ちゃんと取り組んでいるかを確認する巡視ですね」とほほ笑む。

令和7年度の巡視で特徴的だったのは、暑さ指数（WBG T）測定器を導入する事業所が増えたことだ。これまで、天気予報を頼りにアラート発表に備えていたものが、「いま」「この場所」の実測値を把握し、休憩頻度や作業の密度を調整する——そのような視点で現場に向き合う事業所が増えた。WBG T測定器は、安易に業務を止められない公共サービスを維持しつつ、職員を守る強力なツールになった。

## 体調不良を申告しやすい風通しのよさが重要

熱中症は対応が遅れば命に関わる。自分だけでなく、同僚の異変にいち早く気づけるかどうかも大切なポイントだ。現業職であれば特に、チームワークの強みを生かしたい。その意味で、樋口さんが示す「自分の力で水が飲めなかったり、ペッ

トボトルの蓋が自分で開けられなかったりしたら救急車」という目安はわかりやすい。「最悪、助けられる命を助けられないこともある。これができるなかったら、間違っている構わないから救急車を呼びなさいと言っています」。樋口さんの言葉は、迷いを断つ勇気を後押しする。

何よりも重要なのは、体調不良を気軽に申告できる職場の風通しのよさだ。「上司が怖い」「みんなに悪い」と遠慮して言い出せない空気を放置している限り、対策は空回りする。熱中症リスクの高い持病があると、いった機微な健康情報も、本人が必要な範囲で職場と共有できれば、お互いを守り合うチームワークに役立つ。竹中さんも「二日酔いや寝不足、持病のコントロールも含めて、日々の体調を気軽に職場で相談できることが望ましい。それは講話でも常に伝えていきます」と強調している。

## 地道な対策を繰り返しスパイラルアップする

次年度以降を見据え、神戸市はガイドラインの見直しを検討している。今井さんは「神戸市ならではの情報を増やし、とっつきやすさを高めた」という。あわせて、衛生管理者の

レベルの底上げを図りたいとも。ガイドラインを配布してわかったが、なかには熱中症対策の義務化を知らない人もいた。衛生管理者の意識には、やはり職場によってばらつきがあったのだ。

この点は、竹中さんも同意する。「取りこぼしのないように全体のレベルを上げながら、安全衛生委員会を情報の共有と職場ごとの協議の場として有効活用できれば」と考えている。

樋口さんは、コストをかけない、地道な対策の重要性を強調した。ちょっとした声かけや情報提供、職場の風通しをよくするといったことだ。「毎年、異動や新規採用で夏の現場に初めて立つ人は多い。だからこそ、同じ内容であっても、こうした当たり前のことを繰り返し伝えることが大事だと思っています」

猛暑は今後も続く。早めの準備、わかりやすい対応ルール、風通しのよさを生かした「お互いを守り合う」職場の雰囲気——。これらがあれば、過酷な環境下でも働く人の安全は守れる。神戸市の熱中症対策は、「同じ内容」を地道に繰り返しながら、今後もスパイラルアップしていくのだろう。